



北海道公立大学法人  
**札幌医科大学**  
Sapporo Medical University

## 札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	フィンランドにおけるネウボラと精神科医療連携に関する視察報告
Author(s)	澤田, いずみ; 鶴飼, 渉; 池田, 望; 竹田, 里江; 森元, 隆文; 佐藤, 智美; 松山, 清治
Citation	札幌保健科学雑誌, 第 6 号: 53-57
Issue Date	2017 年
DOI	10.15114/sjhs.6.53
Doc URL	<a href="http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6991">http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6991</a>
Type	Technical Report
Additional Information	
File Information	n2186621X653.pdf

- コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- 利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

報告

## フィンランドにおけるネウボラと精神科医療連携に関する視察報告

澤田いずみ<sup>1)</sup>、鶴飼 渉<sup>2)</sup>、池田 望<sup>3)</sup>、竹田里江<sup>3)</sup>、森元隆文<sup>3)</sup>、佐藤智美<sup>1)</sup>、松山清治<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 札幌医科大学保健医療学部看護学科

<sup>2)</sup> 札幌医科大学医学部神経精神医学講座

<sup>3)</sup> 札幌医科大学保健医療学部作業療法学科

フィンランドのクオピオ市を訪れ、日本で課題となっている精神障害をもつ親への支援に焦点を当て、ネウボラと精神科医療機関の連携について視察を行った。人口約10万人のクオピオ市は妊産婦ネウボラ11か所、子どもネウボラ16か所があり、妊娠期～就学前の子どもをもつ家族を対象に健康診査・相談支援が行われていた。ネウボラはクオピオ大学病院精神科と密接に連携しており、大学病院のリハビリテーションセンターでは精神障害をもつ親へのプログラムが提供されていた。また、軽度・中等度の精神障害について、医療センターのかかりつけ医（GP）や保健センターのDepression Nurseによるプライマリケアが行われ、ネウボラとの連携が図られていた。支援と連携において対話が重視され、支援者と家族全体との信頼関係づくりが、精神障害をもつ親への支援の基盤となっていると考えられた。

キーワード：ネウボラ 精神科医療 子育て 連携 フィンランド

### Report on the cooperation between “neuvola” and psychiatric services in Finland

Izumi SAWADA<sup>1)</sup>, Wataru UKAI<sup>2)</sup>, Nozomu IKEDA<sup>3)</sup>, Satoe TAKEDA<sup>3)</sup>,  
Takafumi MORIMOTO<sup>3)</sup>, Tomomi SATO<sup>1)</sup>, Kiyoji MATSUYAMA<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> Sapporo Medical University, School of Health Sciences, Department of Nursing

<sup>2)</sup> Sapporo Medical University, School of Medicine, Department of Neuropsychiatry

<sup>3)</sup> Sapporo Medical University, School of Health Sciences, Department of Occupational Therapy

We visited the city of Kuopio in Finland to study the system of cooperation between “neuvola” (maternity clinics and healthcare centers for young children up to the age of 5) and psychiatric institutions for the support of parents with mental illnesses. The population of Kuopio is approximately 100,000, and it has eleven maternity neuvola and sixteen child healthcare neuvola. From the time of the pregnancy of the mother until the child begins to go to school, the neuvola conduct periodic medical examinations and provide consultation and support for the family. They cooperate closely with the Department of Psychiatry of Kuopio University Hospital, and the rehabilitation center of the hospital offers a group program for parents with mental illnesses and their children. In addition, for people with mild or moderate mental disorders, the general practitioners in the medical center provide primary care and depression nurses in the health center provide help to parents with mental illnesses in cooperation with the neuvola. The importance of dialogue in the process of support and cooperation is stressed, and it is thought that creating a relationship of mutual trust with the whole family is fundamental for the support of parents with mental illnesses.

Key words : Neuvola, Psychiatry and Mental Health, Parenting, Link System, Finland

Sapporo J. Health Sci. 6:53-57(2017)

DOI:10.15114/sjhs.6.53

## I. はじめに

平成27年度における児童相談所児童虐待対応件数は10万件を超え<sup>1)</sup>、児童虐待予防と子育て支援の充実は大きな課題となっている。子どもの虐待による死亡事例に関する第11次検証報告<sup>2)</sup>では、妊婦健診未受診、望まぬ妊娠、家庭の不和、保護者自身の精神疾患、精神不安が主たる要因としてあげられ、支援の充実の必要性が指摘されている。これを受けて、厚生労働省は、平成29年度の児童福祉法、母子保健法等の改正に伴い、市町村に「子育て世代包括支援センター」の設置を義務付けた<sup>3)</sup>。これは、妊娠期から子育て期までの切れ目ない支援の提供を目指したもので、フィンランドで行われている子育て支援システムであるネウボラ (neuvola) をモデルとしている。ネウボラは1922年を起源とし、1944年には制度化され、フィンランド全土に普及している<sup>4)</sup>。今回、筆者らは、フィンランドのクオピオ市を訪れ、日本で課題となっている精神障害をもつ親への支援に焦点を当て、ネウボラと精神科医療機関の連携について視察したので報告する。

## II. 視察の期間と訪問施設

クオピオ市に在住する精神科医である Hilpi Soini 氏のコーディネートにより、2016年8月15日から21日の7日間、KELA (社会保険庁事務所)、クオピオ市保健センター、東フィンランド大学クオピオキャンパスにあるクオピオ大学病院精神医学センターを訪れ、関係職員と対話する機会を得た。

## III. 視察の内容

### 1. フィンランドとクオピオ市の概要

フィンランドは、面積は33.8万km<sup>2</sup>であり日本よりやや小さく、人口は約549万人 (2016年4月末時点) と北海道とほぼ同じで、19の県からなっている<sup>5)</sup>。訪問先のクオピオ市は、北サヴォ県クオピオ郡に属し、ヘルシンキから400km北東に位置し、全面積3,740km<sup>2</sup>の約3割を湖水と森林に覆われた、人口約10万人のフィンランドで9番目の人口を有する都市である<sup>6)</sup>。

### 2. フィンランドにおける精神科医療体制

#### ①保健医療ならびに精神科医療サービス提供のしくみ

視察では、まずKELAを訪れ、保健医療福祉のシステムを学んだ。ここは、保健医療福祉サービスの窓口であり、保険でカバーするサービスをエビデンスに基づき決定する機関でもある。フィンランドでは、いくつかの自治体で20の病院圏 (Hospital District) を作り、種々の保健医療サービスの提供が図られている。地方自治体に1つ以上の

医療センターがあり、医療圏ごとにポリクリニックと言われる専門外来や地域病院がある。医療センターはのちに述べるネウボラがある保健センターに併設されているプライマリケアレベルの診療を行う外来である。地域病院は市立病院のような専門診療科を備えた入院病床を有する病院である。体調不調時は、まず医療センターの看護師が対応し、医師の診療が必要と判断されれば、かかりつけ医であるGP (General Practitioners) による診療が提供される。そこで対応しきれなければ、GPの紹介によりポリクリニックや地域病院を受診し、さらなる専門的治療が必要となれば、大学病院を受診することになる。このように3つの層をなしており<sup>7)</sup>、基本的にGPの紹介なしに地域病院も大学病院も受診できない。国内に5つある大学病院は高度医療について複数の医療圏をカバーする義務がある。

精神科医療においては、不安障害、身体表現性障害、軽症うつ病の診療はプライマリケアレベルであり、医療センターで診療されることになる。中等度のうつ病や薬物依存となると、GPにより精神科ポリクリニックが紹介され、精神科医の診療による薬物療法やソーシャルワーカー、臨床心理士、精神科看護師による conversational help (対話的支援) の他、訪問看護や個人や家族、グループ精神療法が提供される。重症うつ病、躁うつ病、統合失調症への診療は、病院圏にひとつ設置されている精神科病院やデイホスピタル、リハビリテーションセンターなどで、精神科医をはじめ精神科医療専門スタッフによる診療が提供されることになっている<sup>8)</sup>。

#### ②クオピオ市における精神科医療と親支援

今回訪問したクオピオ市は北サヴォ県の病院圏に属し、外来診療は5か所の保健センターと7か所の歯科医院で行われ、居住区ごとにGPが配置されていた。地域病院として Harjula 市立病院があり、精神科を除く10の診療科病棟と外来を有していた。精神医療についてはクオピオ大学病院と連携しており、大学病院敷地内にある Alava 病院においては小児および青年のための精神科外来・入院治療が、成人については Julkula 病院で精神科入院治療が行われ、クオピオ精神医学センター (Kuopion-Psykiatrian-Keskus : KPK) で外来診療ならびに精神科リハビリテーションが提供されていた。これらの精神科医療機関は、北サヴォ県全体の病院圏をカバーしていた。

視察では、KPK (写真1) の intensive rehabilitation team の看護師、ソーシャルワーカー、作業療法士、臨床心理士らと対話できた。KPK は多様なリハビリテーションプログラムを提供しており、その中に精神障害をもつ親へのグループプログラムが提供されていた。親の精神障害についての子どもへの説明には「絵本を活用している。フィンランドでは一般的なものだ」と話し、スタッフが走って絵本を持ってきてくれた。フィンランドでは、2001年から国家的プロジェクトとして「子どもと家族のための効果的なプログラム開発」が行われ、児童精神科医である



写真1 クオピオ大学病院KPKスタッフと

Solantaus Tyttiをリーダーに、精神障害をもつ親とその子どもためのプログラム<sup>9)</sup>が開発され、その絵本もその一環として作成されている。筆者が持参した上野<sup>10)</sup>が日本語に訳した絵本を見せると、「同じよ！なんで？」と驚いていた。Tyttiのプログラムは医療保険でカバーされ、フィンランド各地に広まっていることを実感できた。プログラムには「親本人の希望があれば参加することができる。ネウボラから定期的な情報提供があり、連携しながら支援している。対等に話し合える関係を大切にしている。」とスタッフは話していた。

視察中の質問で、筆者らは“Parent with mental illness”という言葉を多用していたが、Dr. Hilpiからは「どんな状態の精神障害なのか伝えないと、何を答えていいのかわからない。制度が違うから。」と何度も言われ困惑したが、それは、上述のように精神障害の重症度に応じて利用できる医療機関が異なるからであったことが理解できた。

### 3. クオピオ市におけるネウボラと精神科医療機関との連携

#### ①クオピオ市におけるネウボラ

妊産婦・子どもネウボラは、妊娠期～就学前の子どもをもつ家族を対象にした、地域の健診・相談支援の拠点であり、“neuvola”とは、「相談 (neuvo) の場」という意味である<sup>4)</sup>。各自治体が設置している保健センター内を始め、それ以外の場所にも設置され、フィンランド国内に妊産婦ネウボラはおよそ800か所、子どもネウボラは850か所あり<sup>11)</sup>、妊産婦は9回から17回、出産から就学前までは15回の健康診査(健診)を受け、保健師や助産師からアドバイスをもらう。母親と子どもだけでなく家族全体、特に父親の来談が推奨されており、これらの健診は無料である。医療機関の窓口の役割もあり、出産のための病院指定の他、種々の医療機関や専門家と密接に連携している。

クオピオ市の場合、妊産婦ネウボラは11か所、子どもネウボラは16か所が配置されていた<sup>6)</sup>。視察では、クオピオ市内にある保健センターを訪問し、1名の子どもネウボラの保健師と小児科医と面談できた。保健師は「一人の保健



写真2 クオピオ市保健センター内ネウボラの相談室にて



写真3 ネウボラスタッフとHilpi氏(左後ろ)

師は1日に6から7人、一時間から90分かけて相談を行う。一年に面談する人数は375人くらい」と話し、保健師や助産師の相談室は個室で、机と測定用具有り、思い思いのかわいらしいデコレーションが印象的だった(写真2、写真3)。

#### ②保健センターと精神科医療との連携

精神障害をもつ親への支援については、「ネウボラではメンタルヘルスのスクリーニング(エジンバラ産後うつスケール)を行っており、精神疾患を疑われたら精神科医につなぐ。状況によっては本人の了承なしにできる」こと、もしも、親が精神病圏の状態にあったなら「ネウボラはクオピオ大学病院精神科に、24時間いつでも電話連絡をできる」ことが2人の話から分かった。GPを介せず、ダイレクトにネウボラから精神科病院へ照会できる仕組みがあることが理解できた。たいていの場合、親自身も支援を求めて受診するが、受診しない場合は、家族の相談にのりながら受診を促すなど、受診までの責任は大学病院が持つことになる。どうしても受診が難しい場合は、警察が精神科病院を受診させる制度があり、「警察も精神障害をもつ人の対応にトレーニングを受けており、ユニークな制度」だとHilpi氏は述べていた。ネウボラの支援者としての立場が守られているように感じた。

また、ネウボラの支援者が精神疾患などについて親と話をしにくい場合「クオピオの保健センターには、精神科看護師(Depression Nurse<sup>8)</sup>)が5人おり、時に親支援に関

わっている」ことも分かった。Depression Nurseは、特別なトレーニングを受けた精神科看護師であり、軽度から中等度レベルのうつ病、恐怖症や不安障害のある人に対して、conversational helpを提供し、問題解決に役立つ情報提供や支援を提供する役割を担っていた。これはクオピオ市から他の自治体にも広まったとHilpi氏は話していた。他にも家族福祉部門もあり、ソーシャルワーカーなどが「個人相談、家族相談を受ける。必要に応じて訪問や家族対象のセラピーもする」ことも小児科医の話から分かった。

### ③ネウボラの役割と教育背景

ネウボラの保健師は「ネウボラの目的は育児困難の予防。家族のストレンクスを見つけ出すこと、信頼を築くことが大切。Feelingを聴くこと、そして自分自身も実際にFeelingを伝えられることを大切にしている。」と笑顔で話してくれた。視察中、丁度二人の子どもを連れた若い夫婦が笑顔で部屋から出てきた。母親は妊娠中で安心感が伝わってきた。家族全体を対象に早期から作る信頼関係が、精神疾患を含む子育て期の困難を支える素地を作っているように思えた。

フィンランドの看護師養成はポリテクニクといわれる応用科学大学<sup>13)</sup>で行われ(地元ではNursing Schoolと呼ばれる)、卒業認定単位は、看護師では210単位、保健師・救急救命士は240単位、および助産師270単位であり、教育期間は3年半から4年半である<sup>13)</sup>。ネウボラは保健師資格か助産師資格を有する者がなれる。面談した保健師は「子どもの頃からネウボラで働く決めていた」と少し照れた様子で話していた。また、ポリテクニクの入試には「個人面接、集団面接の他に心理テストがあり、対人支援に向かない人は入学できない。」と教えてくれた。日本には心理検査はないという、「だって向かない人はいるでしょう?」と驚かれ、対人関係の能力が重要視されているのが印象的だった。ちなみに大学院教育はユニバーシティ(総合大学)で提供されており、東フィンランド大学クオピオキャンパスにも博士コースが開設されていた。

## IV. 視察から得られた精神障害をもつ親への支援

### 1. 支援プログラムの開発と普及

大学病院ではエビデンスが検証された親と子どもへの支援プログラムが実施されており、フィンランド国内に普及していた。また、妊娠期から子育て期までのネウボラとの連携体制も整っていた。精神科医療機関が、親とその子どもへの支援について手だてを持っていることは、当事者と地域支援者にとっても心強いことであろう。今後、日本においても、精神障害をもつ親の子育てを支える支援方法が集積され、普及されることが望まれる。当事者の望む支援をともに作り上げていく必要がある。また、医療機関のプログラムをより有効に活用してもらうためにも、保健機関

と医療機関の密接した連携システムが必要であることが再確認できた。

### 2. プライマリケアレベルの支援と連携の充実

専門医療機関を活用することにハードルの高いフィンランドにおいて、保健センター、医療センターなどのプライマリケアレベルで広い範囲の精神保健問題がカバーされていた。今回の視察では具体的な実践までは明らかにできなかったが、GPの他、Depression Nurseやソーシャルワーカーなど、精神科や家族支援を専門としたコ・メディカルがプライマリケアの担い手としての役割を果たしていた。日本においても、精神科医療機関の地域格差が問題となる中、コ・メディカルが地域の精神保健活動により積極的に関与していくことが、精神障害をもつ親への支援に限らず、地域レベルでの精神保健問題の予防と早期支援力の向上につながるように思われた。

### 3. 対話的支援の基盤づくり

今回の視察で印象に残ったのは、支援にしても連携にしても、支援者が信頼関係や対話することを重視している点であった。特に印象的だったのは、精神科看護師が提供するconversational helpであった<sup>8)</sup>。指導でもなく、サイコセラピーや心理療法とも区別され、対話的支援、あるいは、対話による癒しとでも訳せるだろうか。すべての支援の根底となる姿勢のように思う。対話を重視する姿勢は“Feelingを聴き、自分のFeelingを伝える”というネウボラの言葉にも感じられた。このような対象者と対等にかかわる姿勢が、精神障害をもつ親、その家族と信頼関係を築き、必要な支援へつなぐことを可能にしていると考ええる。今後、対話的支援の在り方を探求していきたい。このような有意義な視察の機会をくれたDr.Hilpiご夫妻に心から感謝を伝えたい。

この視察は、平成28年度科学研究助成金基盤研究B「精神科医療機関における精神疾患をもつ親への円環式子育て支援モデル構築に関する研究」(課題番号15H05096)の一部であり、開示すべき利益相反はない。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省:報道発表資. 2016. 平成27年度児童虐待対応件数速報値. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132381.html>. (2016-10-18)
- 2) 社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会:子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第11次報告)の概要, 2015: 6. <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintoujidoukateikyoku/0000099959.pdf>. (2016-10-18)
- 3) 厚生労働省:児童福祉法等の一部を改正する法律の公

- 布について（通知）。（平成28年6月3日通知）。[http://www.hoyokyo.or.jp/nursing\\_hyk/reference/28-1s3-2.pdf](http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/28-1s3-2.pdf)。（2016-10-18）
- 4) 高橋睦子:ネウボラ-フィンランドの出産・子育て支援. 京都, かもがわ出版, 2015, p88
  - 5) 外務省:フィンランド共和国基礎データ. <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/finland/data.html#section1>. (2016-10-15)
  - 6) クオピオ市HP : Family Health Care. <https://www.kuopio.fi/web/social-and-health/health-services>. (2016-10-15)
  - 7) Nina Santarirta : 北欧フィンランドに学ぶフィンランドにおける保健医療・リハビリテーション・市民保護 2012. リハビリテーション科学, 13 (2) : 147-153, 2012
  - 8) THE FINNISH ASSOCIATION FOR MENTAL HEALTH : <http://www.mielenterveysseura.fi/en>. (2016-10-11)
  - 9) Solantaus T, Toikka S: The Effective Family Programed. Preventative Services for the Children of Mentally Ill Parents in Finland. International Journal of Mental Health Promotion, 8 : 37-44, 2006
  - 10) トウッティ・ソランタウス著. 上野絵里訳:お母さん, お父さんどうしたのかな? <こころの病気を抱える親をもつ子ども>のハンドブック. 東京, 東京大学出版会, 2016
  - 11) 横山美江, Tuovi Hakulinen-Vitanen : フィンランドの母子保健システムとネウボラ. 保健師ジャーナル, 71 (7) : 598-604, 2015
  - 12) 小山田恭子, 大川貴子, 大谷和子他 : フランス・フィンランドの看護教育の実際と日本への示唆. 看護教育, 51(3) : 220-225, 2010
  - 13) フィンランド看護協会 : Nurse education in Finland. [http://www.nurses.fi/nursing\\_and\\_nurse\\_education\\_in\\_f/nurse-education-in-finland/&prev=search](http://www.nurses.fi/nursing_and_nurse_education_in_f/nurse-education-in-finland/&prev=search). (2016-10-14)

